

藤樹人間学塾： 藤樹思想を学び考え実践する

塾長 田中 清行

「藤樹人間学塾」では、藤樹先生の著書を中心に思想を学ぶとともに、時事問題と組み合わせることで議論しながら考えを深め、日々の生活の場で実践することを目的に毎月開催しています。

本稿ではその模様をお伝えいたします。

五月、第百十四回人間学塾を開きました。参加者は九名でした。

高島藤樹会の活動

『中庸解』第二十四章です。大意について次の様に説明しました。「至誠の道は、およそ天下の事も前もって知ることができ。国家がまさに興らんとするような時は必ず福の兆しが見える。国家まさに滅びようとする時には禍の兆しが見える。(中略)常人は欲心のため心眼暗くしてこれを察知できないけれど、至誠なるものは公平無私にして心眼が明るので禍福のまさに至らんとするとき、善道があれば必ず吉祥があつて福となり、不善があると必ずわざわいの萌しがあつて禍となることを知る。ゆえに至誠は神のようなものである。」

今回は稲盛和夫氏(京セラ創業)が母校の高校生に講演された中で「自分だけよければよいという利己的で邪な心なるべく抑え、思いやりで溢れた美しい利他の心が自分の心の大部分を占めるように、心の庭を手入れして、純粹で美しい思いを心に強く抱き、一所懸命に努力しさえすれば必ず実現できるということとを、神様は約束してくださいます」などを紹介しました。



フリートーカーキング等では「思いを持つことの大切さを学ぶことができ」、「自・他の幸せを半々に考えてやってきて、人生が面白いと思ってる」等の意見、感想をいただきました。

六月、第百十五回人間学塾を開きました。参加者は十二名でした。

まず、コロナワクチンの発明者の女性科学者、カタリン・カリコ博士は「物事が期待通りに進まないときでも周囲の声に振り回されず、自分でできることに集中してきた。私を「ヒーロー」だという人もいるが、本当のヒーローは、医療従事者など感染の恐れがある最前線で働く人たちだ」との発言に感銘を受けたと述べました。

『中庸解』第二十五章です。大意について次の様に説明しました。「誠は人々に天から与えられている性にしたがう。そして自省して固有の性にかえりさえすれば正しい生き方になる。いかなるものも誠でないものはない。(中略)誠は自ら覚るだけではなく、自分以外の他人も誠に導かなければならない。(中略)性の徳は、天、地、人を一体化する道である。ゆえに時に臨んでこのことを用いれば上手いく。」

今回は参考資料として、NHKの「瞑想でたどる仏教」を紹介し、煩惱をなくすためには、第一の矢(痛み)を第二の矢(苦しみ)に直結しないことが大切。苦しみを無くするための「八正道」の説明もしました。フリートーカーキング等では「高島市の聖火リレーで全盲の選手が走っていたが前向きな姿に感動した」等の意見、感想をいただきました。

全盲の聖火ランナーの話は、全盲になったという痛みを苦しみに直結

させず、(前向きな生き方)に昇華された好事例だと思います。

七月、第百十六回人間学塾を開きました。参加者は八名でした。

『中庸解』第二十六章です。大意について次の様に説明しました。「至誠をもって事に当たり、怠ることなく、あきらめずに行えば、長く勤めることが出来る。長く勤めれば必ず目に見えるしるしが顕れる。(中略)至誠がうちに充満すれば、徳の潤いが外面に顕れ、天地を動かし、感化がおこり、工夫造作なくして、功業が行われる。」

今回は参考として、「西郷隆盛」「佐藤一斎」の資料を用意しました。

勝海舟は「西郷隆盛は大いなる誠意に満ちた「至誠」の人であり、江戸城の無血開城が実現したのも、この西郷の至誠のためだった」と語っている。

その西郷の「座右の書」が佐藤一斎の『言志四録』で「人を相手にせず、天を相手にせよ」等が記載されている。その佐藤一斎は、幕府の儒官で朱子学を奉ずる立場にあったが、むしろ陽明学に強い関心を抱いており、五十歳の時、「藤樹書院」を参詣している。藤樹の至誠の教えが幕末・明治維新に大きな影響を及ぼしていたことが分かる。

フリートーカーキングで、参加者からは「至誠が宇宙に充満し私たちが生かされているという教えは、ヨガ